



# 社協が未来の居場所づくりに果たす役割

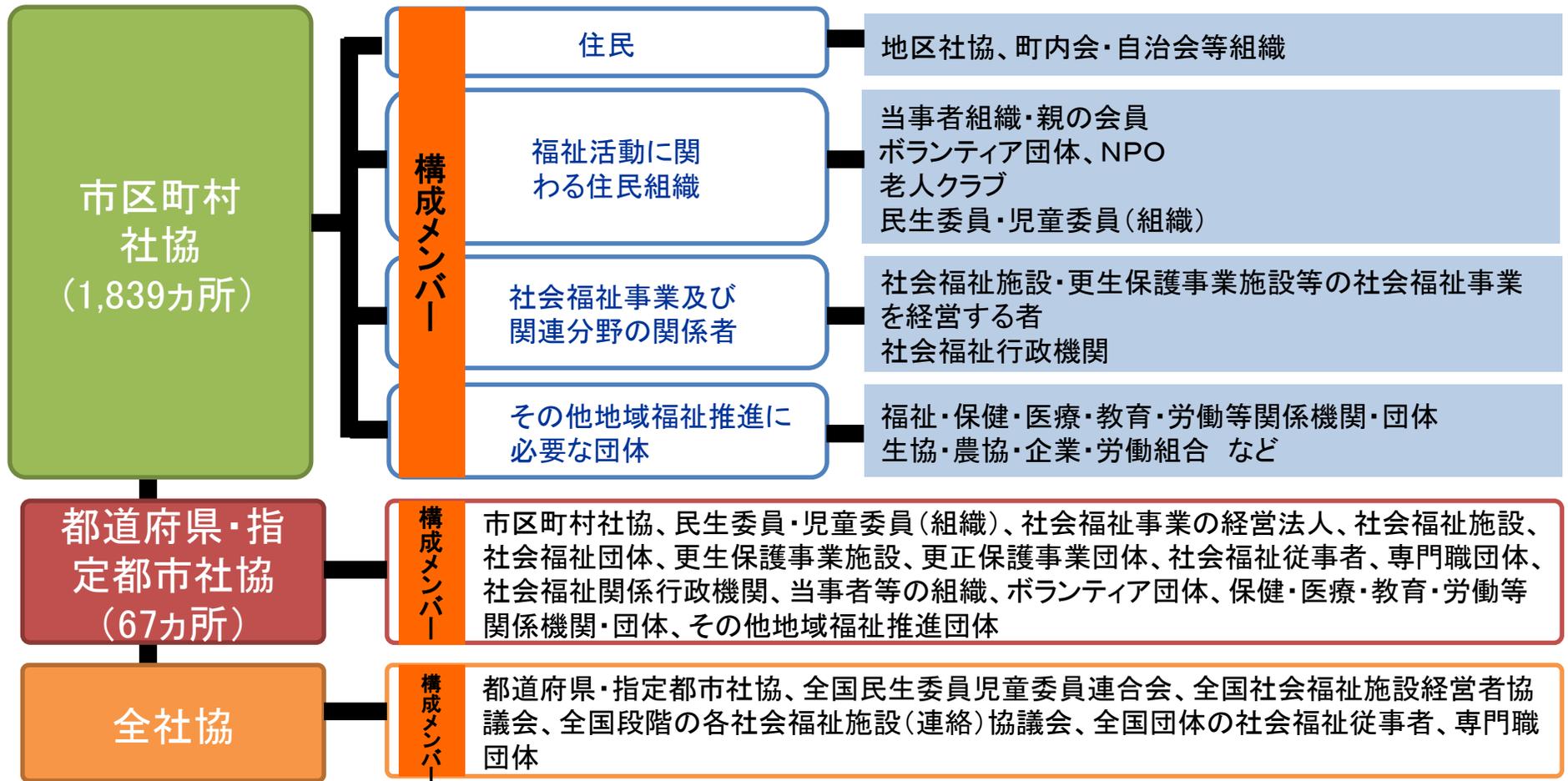
ふれあいネットワーク

社会福祉法人 全国社会福祉協議会

地域福祉部長 高橋良太

# 社会福祉協議会の組織

- 社会福祉協議会(社協)は、すべての市町村、都道府県・指定都市、全国の段階に設置され、全国ネットワークを有する。
- 社協は、住民及び公私の福祉関係者により構成される、地域福祉を推進する民間団体として社会福祉法に規定されている。



# 社協が取り組む居場所づくり～ふれあいいきいきサロン

○平成6年、全社協では、『ふれあい・いきいきサロン開発マニュアル』を発行し、ふれあい・いきいきサロンづくりに取り組むことを提案した。

○「ふれあい・いきいきサロン」とは、同マニュアルでは「**少人数の参加者が歩いていける場所で、住民と参加者とが共同企画運営していく楽しい仲間づくりの場所**」この提案に先立って、全社協では平成5、6年の2年間にわたり、高齢者分野における当事者や家族の組織についての事例調査や仲間づくり活動についての調査研究事業を行った。

○そのなかで、①高齢者組織の多くは、「役員がいる」「名簿が完備されている」など非常に組織的である一方、参加を促進するためには、“**楽しさ**”が重要であり、組織的・画一的なやり方では社会参加はすすまず、「**組織づくりから仲間づくり**

**へ**」という発想の転換が必要、②活動の多くが専門職が関わって作られたものであるが、専門職が異動等でいなくなると、すぐに活動が停滞してしまうため、新たな発想で**当事者と地域住民が一緒につくりあげていく**ような活動を提案していくことが必要であることが明らかになった。こうした考え方にもとづき、「ふれあい・いきいきサロン」は提案された。

○その後も全社協では、精神障害者のサロン(平成7、8年)、サロンによる高齢者の介護予防事業の推進(平成12、13年)、子育てサロン(平成13、14年)と、多様なサロン活動の提案を重ね、全国への普及をはかった。



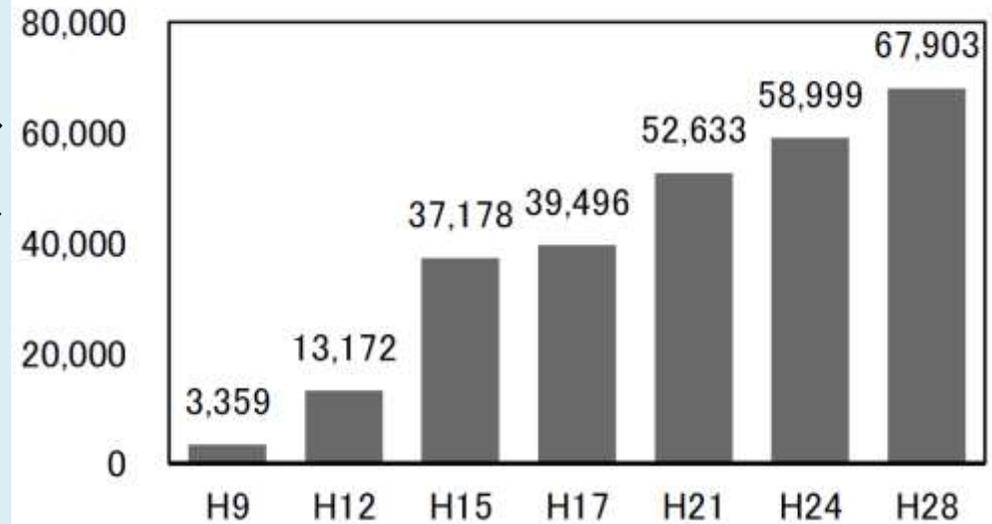
# ふれあい・いきいきサロンは無理なく楽しく

## 【ふれあい・いきいきサロンの効果】

- 高齢者が寝たきりや認知症になる最大の原因は“閉じこもり”。
- ふれあい・いきいきサロンで、**無理なく、楽しく**、話して笑い、時間を過ごす。
- そうしたことが、高齢者の新しい生活習慣として広まるとき、ご近所の中で「寝たきり知らず、認知症知らず」が広がる。
- さらに、仲間づくりの輪が広がることで、まちも楽しく明るいものになる。

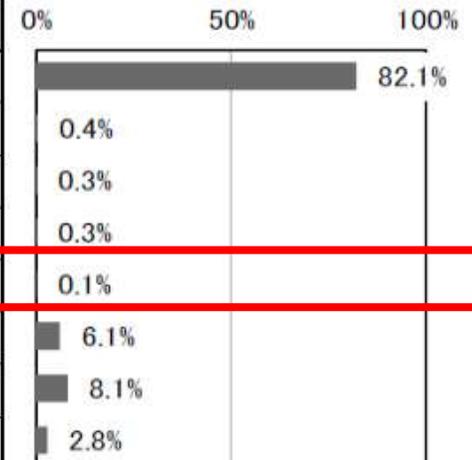
- 効果1 **楽しさ・生きがい・社会参加**
- 効果2 **無理なく**体を動かせる
- 効果3 適度な**精神的刺激**
- 効果4 健康や栄養について**意識する習慣**がつく
- 効果5 **生活にメリハリ**をつける
- 効果6 **閉じこもらせない**

(か所)



【図表148】ふれあい・いきいきサロンのか所数

	社協数	合計	割合	平均
高齢者	1,316	55,721	82.1%	42.3 か所
身体障害者	1,316	268	0.4%	0.2 か所
知的障害者	1,316	170	0.3%	0.1 か所
精神障害者	1,316	175	0.3%	0.1 か所
ひきこもり	1,316	51	0.1%	0.0 か所
子育て家庭	1,316	4,134	6.1%	3.1 か所
複合型	1,316	5,479	8.1%	4.2 か所
その他	1,316	1,905	2.8%	1.4 か所
全体	1,316	67,903	100.0%	51.6 か所



# 生活困窮者やひきこもりを対象とする支援事業(制度外)の有無(H27年度実績)

【図表177】生活困窮者やひきこもりを対象とする支援事業(制度外)の有無(H27年度実績)



上段:社協数、下段:%

<その他事業 主な記載の抜粋>

- ・ひきこもりサポーター養成
- ・ゴミ屋敷清掃支援事業
- ・入居債務保証
- ・ひきこもり者家族の会
- ・行旅病人等の緊急援護

# 身近な圏域における拠点の機能

## 拠点

住民による  
B. 相談窓口

D. 柔軟対応システム

E. 見守り・支援ネットワーク

F. 住民への啓発活動

A. 集う場、交流の場

C. 生活支援サービス

会食サービス、配食サービス  
移送サービス  
福祉用具貸出（リサイクル）等々

ふれあい・いきいきサロン（高齢者、子育て、知的障害者、精神障害者）  
ミニデイ  
健康教室  
ひとり暮らし老人の会  
介護者家族の会  
その他  
麻雀教室、世代間交流会、男の料理教室、お花見、敬老の集い、ふれ愛広場、クリスマス会、バザー 等々

介護教室、福祉講座、福祉教育、広報誌発行等々

他の仕組みで対応できない個別支援（送迎、調理介助、友愛電話、買物、相談、家の片づけ、書類作成など）

地域福祉を推進する基礎組織による活動である場合が多いが、それ以外の活動も存在する（互いの連携が重要）

福祉委員、民生委員、ボランティアによる日常的・継続的見守り（支援）活動

ひとり暮らし高齢者  
高齢者夫婦世帯  
高齢者障害者  
子育て家庭  
子ども  
青少年  
：  
：  
（ひいては地区の住民すべて）



# 社協によるひきこもりの人と家族への支援

- 滋賀県社協 ひきこもり初調査、県内に1428人 大半は支援受けず(中日新聞 2019年9月28日)
- 福島県社協 民生委員対象に定期的研修実施し、「中高年ひきこもり」早期発見へ(福島民友新聞 2019年09月13日)
- 中野区社協 「制度の狭間」の相談に応じ必要な支援を行う「福祉何でも相談」 引きこもりの居場所、家族会も立ち上げ(東京都社協「福祉広報」2019年8月)
- 豊中市社協 ひきこもりからの自立を目指す人の就労体験の場 「びーの×マルシェ」 清掃・軽作業などの有償活動も(産経新聞 2019年5月14日)
- 井原市社協 「引きこもり」当事者の居場所に 交流支援拠点「こもれびの杜」開設(山陽新聞 2019年02月26日)
- 豊明市社協 ひきこもりの人とその家族等の相談窓口「はばたき」開設中 居場所・フリースペース「スワロー」も定期開催(広報とよあけ 2019年2月1日)
- 総社市社協 ひきこもり支援センター「ワンタッチ」に続いて、平屋を賃借し居場所「ほっとタッチ」オープン(山陽新聞 2018年11月12日)
- 洲本市社協 ひきこもり当事者などの居場所づくり～共に過ごすゆるやかな仲間づくり～(兵庫県社協「ひょうごの福祉」 2018年9月)
- 横浜市南区井土ヶ谷地区社協 不登校や引きこもりについて知る講座開催 地区の住民ら45人が参加(タウンニュース 2018年10月4日)
- 伊賀市社協 引きこもり支援の居場所 フリースペース「nest(ネスト)」開設(毎日新聞 2018年6月20日)
- 藤里町社協 ひきこもり、働く力 自立支援施設「こみっと」開設 狙いは一人一人の力を最大限に引き出すこと(福井新聞 2018年4月19日)
- 奈良市社協 地域住民が運営するコミュニティスペース 多機関・多分野連携の「いいばしょプロジェクト」実施(全社協『NORMA社協情報』 2017年9月)
- 国立市社協 「ひきこもり大学家族学部 in くになち」を開催へ 参加家族や当事者で家族会設立も予定(池上正樹「東京都8区市で『ひきこもり家族会』続々誕生」2018年2月1日)
- 大津市社協 ニートやひきこもりなど対象の子ども・若者総合相談窓口開設 心配ごとや悩みがあれば気軽に相談を(朝日新聞 2017年11月2日)
- 篠山市社協 NPOと連携し、不登校やひきこもりを経験した若者の新たな居場所づくり(ひょうごの福祉 2017年7月号)
- 由利本荘市社協 社会福祉法人と連携し、ひきこもりの若者の居場所づくりを支援 「あおぞらサロン」開催(全社協「NORMA社協情報」 2017年1月)
- 京都市社協 就労経験のない10年来のひきこもり男性を仕事につなげる 4年目迎えたチャレンジ就労体験事業(京都市社協「福祉のまちづくり」 2017年1月)
- 芦屋市社協 総合相談から始まる多様な社会参加の場づくり 個別課題を地域での解決につなげる(兵庫県社協「ひょうごの福祉」 2017年4月)

滋賀県社会福祉協議会は、県内のひきこもりの実態に関する初の調査結果を公表しました。県内には少なくとも1428人のひきこもり者がおり、4割以上が10年以上ひきこもっている一方で、何らかの支援を受けている人は全体の16.7%にとどまることが明らかになりました。結果を受け、県社協は10月からひきこもりに関する電話相談窓口を開設します。実態調査は、仕事や学校などに行かず、家族以外の人と交流のない「ひきこもり」の人の支援につなげようと、7～8月に実施。県内の民生委員らに協力を呼び掛け、各委員が担当地域で把握しているひきこもり者の人数や年齢、家族構成、ひきこもりに至った原因などをとりまとめました。

結果によると、ひきこもりに至った経緯では、失業や病気、不登校などが多いですが、約4割は理由が不明。生活保護や医療機関、作業所などの支援を受けている人は10代と60代でやや多かったですが、全体の4割が支援を受けているかどうか分かりませんでした。

(中日新聞 2019年9月28日)

中日新聞 CHUNICHI Web

滋賀

2019年9月28日

### ひきこもり、県内に1428人 県社協初調査、大半は支援受けず

県社会福祉協議会（県社協）は、県内のひきこもりの実態に関する初の調査結果を公表した。県内には少なくとも千四百二十八人のひきこもり者がおり、四割以上が十年以上ひきこもっている一方で、何らかの支援を受けている人は全体の16.7%にとどまることが明らかになった。結果を受け、県社協は十月からひきこもりに関する電話相談窓口を開設する。

実態調査は、仕事や学校などに行かず、家族以外の人と交流のない「ひきこもり」の人の支援につなげようと、七～八月に実施。県内の民生委員らに協力を呼び掛け、各委員が担当地域で把握しているひきこもり者の人数や年齢、家族構成、ひきこもりに至った原因などをとりまとめた。

結果によると、ひきこもりに該当する千四百二十八人のうち、76%が男性。年齢別では就職氷河期に新卒期を迎えた四十代が最も多く32%で、三十代が22%と次に多くなっている。

家族構成では、両親との同居が44%。五十代では、母親との同居が両親との同居を上回っており、高齢の母親とひきこもり者が暮らす状況がうかがえる。一人暮らしも12%に上った。

ひきこもりに至った経緯では、失業や病気、不登校などが多いが、約四割は理由が不明。生活保護や医療機関、作業所などの支援を受けている人は十代と六十代でやや多かったが、全体の四割が支援を受けているかどうか分からなかった。

支援を受けていない人が多いことから、県社協は電話相談を開設することにした。十月三日に開始し、毎週木曜日の正午から午後六時に受け付ける。

県社協の谷口郁美事務局長は「結果からは当事者の同居家族も高齢化が進むなど、本人や家族だけで解決するのは不可能なことが分かる。ひきこもりは個人の問題ではなく、社会の問題だ」と指摘。現状では、ひきこもりを隠したがる家族も多いことから「気軽に電話相談をしてもらい、一人でも多くの人が支援につながってほしい」と話している。(問) ひきこもり電話相談＝077(526)7031

社会問題化している中高年(40～64歳)のひきこもり対策として、福島県は2019年度、専門的な知識を有する民生委員を養成します。地域に密着した民生委員の活動の中で、退職などをきっかけに自宅にひきこもる人を見つけ、早い段階で手を差し伸べることで地域での孤立を防ぎ、自立につなげます。

具体的には、**福島県社会福祉協議会が民生委員を対象に定期的に開催する研修会で、精神保健福祉士ら専門職員を配置した相談機関、県ひきこもり支援センターの活動内容などを紹介し、民生委員が対象者を支援機関に円滑につなぐ体制を構築**します。「趣味の用事の時にだけ外出する」「近所のコンビニには出掛ける」などひきこもりの定義も周知し、早期発見につなげます。また、生活困窮者を支援する福島県社協の「生活自立サポートセンター」もハローワークと協力して中高年の就労や生活再建プランを策定する取り組みを進めており、ひきこもりの支援対策としても活用します。

(福島民友新聞 2019年09月13日)

## 「中高年ひきこもり」早期発見へ 福島県、民生委員活動を活用

9/13(金) 11:52配信

福島民友

社会問題化している中高年(40～64歳)のひきこもり対策として、福島県は本年度、専門的な知識を有する民生委員を養成する。地域に密着した民生委員の活動の中で、退職などをきっかけに自宅にひきこもる人を見つけ、早い段階で手を差し伸べることで地域での孤立を防ぎ、自立につなげる。

12日の9月定例県議会で県民連合の宗方保議員(須賀川市・岩瀬郡)の代表質問に戸田光昭保健福祉部長が答えた。

内閣府の調査では、半年以上にわたり家族以外の人とほとんど交流せず、自宅にいる中高年のひきこもりは全国で61万3千人と推計され、ひきこもりが若者特有の現象ではない現状が表面化している。親が80代、本人が50代で生活が困窮する「8050問題」も指摘される中、県は県内に約4280人いる民生委員の協力を得て支援を強化する。

具体的には、県社会福祉協議会が民生委員を対象に定期的に開催する研修会で、精神保健福祉士ら専門職員を配置した相談機関、県ひきこもり支援センター(福島市)の活動内容などを紹介し、民生委員が対象者を支援機関に円滑につなぐ体制を構築する。「趣味の用事の時にだけ外出する」「近所のコンビニには出掛ける」などひきこもりの定義も周知し、早期発見につなげる。また、生活困窮者を支援する県社協の「生活自立サポートセンター」もハローワークと協力して中高年の就労や生活再建プランを策定する取り組みを進めており、ひきこもりの支援対策としても活用する。

# 東京都中野区社協【「制度の狭間」の相談に応じ必要な支援を行う「福祉何でも相談」引きこもりの居場所、家族会も立ち上げ】

中野区社会福祉協議会では、16年前から、区内15の圏域ごとに「地域担当制」を敷き、担当職員が居場所づくりや地域活動の支援等を行っています。平成26年、中年のひきこもりの方の相談を受け、1年以上に渡って支援したことをきっかけに、平成27年6月より、いわゆる「制度の狭間」の相談を受け、必要な支援を行う「福祉何でも相談」事業を開始しました。

平成27年度に行った**民生児童委員等への調査により、区内にひきこもりの方が167人いるとわかりました。**そこで、この年の「第2回なかの地域福祉推進フォーラム」において中高年のひきこもりを考える分科会を実施したところ、**参加した区民から「当事者が気軽に参加、相談できる居場所をつくりたい」という声**が上がりました。

これを機に準備会が発足し、**当事者団体の協力を得てひきこもりに関する学習や居場所の見学等**を行い、平成29年4月にひきこもりの方の居場所「カタルーベの会」が立ち上がりました。会は毎月1回開催し、**毎回、元当事者も含むスタッフと参加者、10名強が参加しています。**会のSNS等を見て他区市や他県からも参加があり、本人や家族が、社会や支援情報等とつながる場となっています。この活動から**ひきこもりの家族会「中野わの会」も立ち上がり**ました。(東京都社協「福祉広報」2019年8月)

～中野区社会福祉協議会の取組み～「福祉何でも相談」で個人を支える



(右から)中野区社協 事務局長 秋元健策さん、

地域活動推進課 福祉何でも相談主事 後藤利来さん、同課課長補佐 早野由佳さん

中野区社協では、16年前から、区内15の圏域ごとに「地域担当制」を敷き、担当職員が居場所づくりや地域活動の支援等を行っています。活動を重ねるうち、住民から「気になる方」の相談を受けることが増えていきました。「事業や制度だけでは支援できない方や、制度の対象であってもSOSを出せない方がいることから、一人ひとりの状況に応じ、一歩踏み込んだ支援をする必要性を強く感じていた」と、中野区社協事務局長の秋元健策さんは言います。

そんな折、平成26年度中に中年のひきこもりの方の相談を受け、1年以上に渡り支援しました。これがきっかけとなり、平成27年6月より、いわゆる「制度の狭間」の相談を受け、その方に応じて必要な支援を行う「福祉何でも相談」（以下、「何でも相談」）事業を開始しました。

「何でも相談」には、10～90代まで、幅広い年代の方からの相談があります。ひきこもりに関する相談は、平成27～29年度までの3年間に60件ありました。特に家族や支援者から、40、50代の男性に関する相談が多い状況です。相談員は、地域担当職員とともに自宅を訪問したり、特に適切な機関に同行し手続きを支援したり、人との関わりの中で生活できるよう地域住民につないだり、一人ひとりに必要な支援を行っています。

# 大阪府豊中市社協【ひきこもりからの自立を目指す人の就労体験の場 「びーの×マルシェ」 清掃・軽作業などの有償活動も】

「よかった、今日はパンがまだあるね」

「このサンドイッチもおいしいですよ」

大阪府豊中市の日用品店「びーの×マルシェ」で客に対応する40代の女性店員は2018年5月までの7年間ひきこもりを続けていました。この店は**豊中市社会福祉協議会**などが運営に協力。ひきこもりからの自立を目指す人の就労体験の場として平成29年6月に開店しました。

これまでも豊中市社協は、家族らの相談を受けて当事者を戸別訪問し、地域の清掃や軽作業などへの参加を提案。2時間で500円の活動費を支給し社会参加を促す取り組みには、現在100人以上が登録し、その後の就労体験などを経てこれまで約40人が就職しました。

(産経新聞 2019年5月14日)

## 【8050の実像－中高年ひきこもり61万人】(中) 救えなかった孤立した親子

2019.5.14 17:51 | ライフ | くらし



中高年ひきこもりの相談をする豊中市社会福祉協議会福祉推進室の勝部麗子室長＝9日午後、大阪府豊中市（山田哲司撮影）

「ガス事故の恐れがあります。家から出ないでください」。4月21日午後、京都市西京区の住宅地。異臭がするとの情報にガスマスクをつけた消防隊員らがこう呼びかけて、一軒の民家に入った。「郵便物がたまり、住人と連絡が取れない」。不審に思った民生委員がこの日、京都府警に駆け込んだことがきっかけだった。

府警によると、この家の1階で、80代の母親と50代の息子の遺体が見つかった。いずれも死後1週間程度が経過していた。捜査関係者によると、母親は病死。遺書はなかったが、息子はその後自ら命を絶った可能性が高いことが、司法解剖で分かった。息子は長い間、ひきこもりだったという。

近くの女性は「息子さんは数十年間にわたりひきこもっていて、年金で生計を立てているとお母さんが明かしていた」と話す。

こんな証言もある。「民家から時折、男性が大声で怒鳴る声が漏れていた」。近くに住む男性は明かし、こう続けた。「仮に息子がひきこもりだったと知っていたとしても、2人にどうやって声をかけてあげればよかったのか」

井原市西方町に、**引きこもりの人の社会参画を後押しする拠点「こもれびの杜」が設けられました。**井原市社会福祉協議会職員らでつくるボランティアグループ「TEAM HK」が、当事者たちが集える“居場所”として整備。**毎月1回、体験活動やレクリエーションを行い、自ら一歩を踏み出せるよう手助け**します。

引きこもりの長期化や高齢化が全国的に課題となる中、井原市社協が中心となって取り組んでいる「ひきこもりほっとけん事業」の一環。同じ境遇の人と関わることで不安感を取り除いたり、交流を通じて自己肯定感の醸成を図ったりすることを目的としています。拠点は民家を取り壊した跡地（約260平方メートル）を活用。ピザ焼き小屋や倉庫兼休憩所があり、市社協が開設する相談支援センターや、市適応指導教室などを通じ、当事者や保護者に来所を呼び掛けていきます。開所日は毎月第4火曜日。

井原市社協はこれまで、市内の引きこもりの人の実態調査（2016年）、相談支援センターの開設（2017年）、支援者養成講座（2018年）などを行っています。（山陽新聞 2019年02月26日）

岡山 牡羊座：5位 山陽新聞 digital

トップ 岡山エリア スポーツ 国内外 タウンナビ 特集・コラム 地域

ランキング キーワード さんデジ特集 動画 AIアナ 写真 天気 エンタメ MEDICA

### 「引きこもり」当事者の居場所に 井原で社協職員らが交流拠点開設

地域話題 井原市

シェア ツイート

井原市西方町に、引きこもりの人の社会参画を後押しする拠点「こもれびの杜」が設けられた。井原市社会福祉協議会職員らでつくるボランティアグループ「TEAM HK」が、当事者たちが集える“居場所”として整備。毎月1回、体験活動やレクリエーションを行い、自ら一歩を踏み出せるよう手助けする。



井原市のボランティアグループが設けた引きこもりの人の支援拠点「こもれびの杜」

引きこもりの長期化や高齢化が全国的に課題となる中、市社協が中心となって取り組んでいる「ひきこもりほっとけん事業」の一環。同じ境遇の人と関わることで不安感を取り除いたり、交流を通じて自己肯定感の醸成を図ったりすることを目的としている。

拠点は民家を取り壊した跡地（約260平方メートル）を活用。ピザ焼き小屋や倉庫兼休憩所があり、市社協が開設する相談支援センターや、市適応指導教室などを通じ、当事者や保護者に来所を呼び掛けていく。

# 愛知県豊明市社協【ひきこもりの人とその家族等の相談窓口「はばたき」開設中 居場所・フリースペース「スワロー」も定期開催】

豊明市社会福祉協議会では、平成30年4月よりひきこもりの人とその家族等の相談窓口「はばたき」を市から受託、開設しています。窓口は、市役所の1階にあり、個室の相談室もあります。社会参加から就職活動まで支援する専任職員が2名配置され、平成30年度は51人の相談を受け付けました。相談は来所・電話・訪問など、希望に沿えるよう配慮し、不安や困りごと、気持ちを聞きながら、今できることを一緒に考えることを大切にしています。

継続的な相談に応じるほか、病院・買い物・散歩など外出時の付き添い支援、家庭以外で自分らしく過ごせる居場所、フリースペース「スワロー」を毎週水曜日に開催しています。スワローでは月に1回、家族のための会も開催しています。また、学習支援が必要な場合には、専門の支援者や、ボランティアによる学習のサポートを行っています。平成30年6月～7月には、連続3回の「はばたきサポーター養成講座」開講。各回約60人が参加し、32人にサポーター登録をしていただきました。スワローでの活動や訪問など、幅広い活躍が期待されています。

働きたい人には、その人の状況に応じ、就労体験の紹介やご本人に合う働き方を見つけるためのサポートができる支援機関につなぐなど就労支援も実施しています。(広報とよあけ 平成31年2月1日号)



# 岡山県総社市社協【ひきこもり支援センター「ワンタッチ」に続いて、平屋を賃借し居場所「ほっとタッチ」オープン】

岡山県内の市町村で引きこもりの支援で先進的とされる総社市。総社市社会福祉協議会は、2017年4月、ひきこもり支援センター「ワンタッチ」を開設。2018年9月末までの1年半に136人（うち40歳以上が52人）、延べ2700件の相談に応じ、本人との面談などを重ねた結果、16人が就職や進学、ボランティア活動といった「社会参加」を果たしました。

さらに2018年2月には自宅から出て過ごせるよう、賃借した平屋を「ほっとタッチ」としてオープン。平日午後3時～5時、同支援員や養成講座を修了したサポーターと茶飲み話をしたり、テレビゲームで遊んだりしながらゆったり過ごすことができる“居場所”です。引きこもり状態から脱し、農業関係の仕事をはじめた男性は「（引きこもっている時は）家族との折り合いが悪く、話せる雰囲気じゃなかった。第三者と話し、親身に聞いてもらえたことで自分自身を見つめ直せた」と感謝します。

（山陽新聞 2018年11月12日）

## 写真ニュース

### 引きこもり県内1.2万人の内情 長期・高齢化で官民が対策強化

2018年11月12日17時20分 更新



総社市が開設している居場所「ほっとタッチ」の一室。支援員や市民サポーターらと交流しながら、社会参加のきっかけをつかんでもらう

⇒この写真の記事へ

洲本市では、ひきこもりの当事者のつどい「わかかさカフェ」が2017年度から、また、その家族のつどいが2018年度から開催されています。きっかけは、認知症をささえる家族の会「にじの会」の活動から派生したサロンに、洲本市社会福祉協議会職員がさまざまな当事者の参加を促していったこと。その中で、サロンと同じ時間・場所で当事者の居場所づくりが始まりました。

「わかかさカフェ」は当初月1回(第1金曜日)の開催で、しばらくは支援者が会話をつないだり、トランプをしたりしていましたが、本人たちの想いを聞く場としてミーティングの開催を提案し、各自がやりたいことを出し合ってみました。すると、「仕事がしたい」「バーベキューをやってみたい」といった声があがり、できそうなことから実現していくことになりました。今では「わかかさカフェ」は毎週金曜日の開催となり、20代から60代のメンバーは自分たちでコミュニケーション麻雀の準備、健康体操や軽作業など、各自が思い思いに過ごします。他にも、会場の会館に花を植え、毎日の水遣り当番を決め、雨でも気になって覗きに來るメンバーもいます。

(兵庫県社協「ひょうごの福祉」 2018年9月)

洲本市では今年から、ひきこもりなどの当事者の家族のつどいが始まっていて、市外からも参加があるんだって。今回はその元となった当事者の居場所づくりについて紹介するよ。



### みんなで作るひょうごの福祉

地域で支え合い、地域を元気にする取り組みを紹介します。

**居場所としてのつどいの立ち上げ**  
洲本市ではひきこもりの当事者のつどい「わかかさカフェ」が昨年度から、その家族のつどいが本年度から開催されている。きっかけは、認知症をささえる家族の会「にじの会」の活動から派生したサロンに、社協職員がさまざまな当事者の参加を促していったことだった。その中で、サロンと同じ時間・場所で当事者の居場所づくりが始まった。「わかかさカフェ」は当初月1回第1金曜日の開催で、しばらくは支援者が会話をつないだり、トランプをしたりしていたが、本人たちの想いを聞く場としてミーティングの開催を提案し、各自がやりたいことを出し合ってみました。すると、「仕事がしたい」「バーベキューをやってみたい」といった声があがり、できそうなことから実現していくことになった。

**メンバーの「やりたい」から活動の広がりへ**  
今年の4月にはボランティアの協力を得てバーベキューを、6月には他団体と合同でどん作りを楽しんだ。

### ひきこもりなどの当事者の居場所づくり

～共に過ごすゆるやかな仲間づくり～

**自主的な運営と家族への支援**  
これまで居場所がないためにひきこもりが続いて、7月には地元のレストランが主催する「おもつしよ市」に出店することとなった。当日の運営には不安もあったが、開始10分前にはメンバーが集合し、初出店にも関わらずお店は多くの来場者で賑わいを果たした。メンバーは、やり終えた安堵感と達成感からまたやりたいと勢いづく。

今では「わかかさカフェ」は毎週金曜日の開催となり、20代から60代のメンバーは自分たちでコミュニケーション麻雀の準備、健康体操や軽作業など、各自が思い思いに過ごす。他にも、会場の会館に花を植え、毎日の水遣り当番を決め、雨でも気になって覗きに來るメンバーもいます。



メンバーが準備した麻雀。道でも参加できる



改めて見ると綺麗なりんや白とメンバー

#### 取材を終えて

「わかかさカフェ」の活動には、ボランティアを中心に専門職や行政などから有形無形のサポートがあります。中でも認知症をささえる家族の会「にじの会」は、運営支援とともに同会でも培った参加意識を高める手法を提供しており、当事者による市民活動がさらなる当事者支援につながっている姿に感謝を受けました。

社会福祉法人洲本市社会福祉協議会  
洲本市山手二丁目2-26  
TEL 0799-26-0022

こもり家庭内での関係が全てであった人も「わかかさカフェ」に來ることで、世間の輪に入って自己肯定感が高まっていく。今後もより自主的な運営を目指すと共に、家族への支援を行い、楽しく笑えることを1つでも得てもらいたいと考えている。

不登校や引きこもりについて知る講座が2018年9月29日、井土ヶ谷共同ビル集会所で行われ、井土ヶ谷地区の住民ら45人が参加しました。講座は井土ヶ谷地区社会福祉協議会の主催。同地区社協は毎年、福祉に関係するテーマを決め、専門家の話を聞く「温かい町づくりの会」を開いています。今回は、不登校、ひきこもりの若者らを支援している「K2インターナショナルグループ」の自立援助ホーム「オラシオ寮」のホーム長を講師に招いて話を聞きました。

ホーム長は、オラシオ寮で自分の家族とともに、親がいない、家庭にいられない10代の子どもと共同生活を送っています。その経験から「不登校や引きこもりの子は、第三者と共同生活することで自立につながる」と話しました。参加者からの「身近に不登校や引きこもりの例がなく、どうやって予兆をつかむのか分からない」との質問に「まずは地域にどんな子どもがいて、何年生なのかを気にすることから始めてほしい」とアドバイス。「当事者の家族は抱え込まないでほしい」と呼び掛けました。

(タウンニュース 2018年10月4日)

神奈川県全域・東京多摩地域の地域情報紙

タウンニュース

ホーム 横浜 川崎 相模原・東京多摩 県央

南区版 掲載号：2018年10月4日号

井土ヶ谷  
引きこもりを知る  
地区社協、専門家招き講座  
社会

不登校や引きこもりについて知る講座が9月29日、井土ヶ谷共同ビル集会所で行われ、井土ヶ谷地区の住民ら45人が参加した。



話し合う参加者

講座は井土ヶ谷地区社会福祉協議会（千葉六男会長）の主催。同協議会は毎年、福祉に関係するテーマを決め、専門家の話を聞く「温かい町づくりの会」を開いている。今回は、不登校、ひきこもりの若者らを支援している「K2インターナショナルグループ」の自立援助ホーム「オラシオ寮」＝磯子区＝でホーム長を務める坂本牧裕さんを講師に招いて話を聞いた。

伊賀市社会福祉協議会は、ニートや引きこもり状態にある人を支援するフリースペース「nest(ネスト)」を2018年6月20日に伊賀市社協内に開設します。21日からは電話相談も受け付けます。いずれも無料。

nestは英語で、巣や居心地のいい場所の意味。フリースペースは毎週水曜午後1～5時に開きます。パソコン3台や相談室もあり、広さは20畳ほど。伊賀市社協は「持ち込んだゲームをしてもらっても、さっと帰ってもらってもいい。本人にあった支援と一緒に考えます」としています。

電話相談は毎週木曜正午～午後5時半に、受け付けます。相談員が自宅を訪問し、本人や家族と話をする対応も可能です。いずれも対象は本人が伊賀市在住ですが、相談は家族や友人からも受け付けます。伊賀市社協の担当者は「家族で問題を抱え込んでいるケースがある。第三者が関わることが解決の一步になることもある」と利用を呼び掛けています。

(毎日新聞 2018年6月20日)



### 引きこもり

支援の居場所 フリースペース開設 きょう伊賀市社協  
／三重

毎日新聞 2018年6月20日 地方版



伊賀市社会福祉協議会内に開設されるnestのフリースペース=三重県伊賀市上野中町で、大西康裕撮影

伊賀市社会福祉協議会は、ニートや引きこもり状態にある人を支援するフリースペース「nest(ネスト)」を20日に同市上野中町の上野ふれあいプラザ3階の社協内に開設する。21日からは電話相談も受け付ける。いずれも無料。

nestは英語で、巣や居心地のいい場所の意味。フリースペースは毎週水曜午後1～5時に開く。パソコン3台や相談室もあり、広さは20畳ほど。社協は「持ち込んだゲームをしてもらっても、さっと帰ってもらってもいい。本人にあった支援と一緒に考えます」としている。

### 木曜に電話相談

電話相談は毎週木曜正午～午後5時半に、受け付ける。相談員が自宅を訪問し、本人や家族と話をする対応も可能。いずれも対象は本人が伊賀市在住だが、相談は家族や友人からも受け付ける。社協の担当者は「家族で問題を抱え込んでいるケースがある。第三者が関わることが解決の一步になることもある」と利用を呼び掛けている。問い合わせは社協(0595・22・0084)。【大西康裕】

【伊賀版】

# 秋田県藤里町社協【ひきこもりの人たちの居場所、交流拠点、働く場としても 地域福祉の拠点「こみっと」が効果】

秋田県藤里町社会福祉協議会では、2010年、**地域福祉の拠点として「こみっと」を開設**しました。介護予防の機能訓練室、食事サービスの調理室、カラオケや囲碁将棋を楽しむサークル室、婦人会や老人会など各種団体の共同事務所…。藤里町社協の会長は「**ひきこもりとか高齢者とか特定せず、福祉サービスが必要な人に集まってもらう場所にしたかった**」。いろいろな人が集うことで、**ひきこもりに対する偏見を和らげる狙い**もありました。

10年以降の5年間で、113人のひきこもりのうち、86人が支援により何らかの仕事に就き自立。2017年6月には町民を対象に、ボランティアを含めいろいろな仕事を紹介する登録制度「プラチナバンク」を創設しました。希望する収入や仕事時間、経験などに合わせて、藤里町社協がマッチングします。300人以上が登録しており、社協が運営するレストランや、高齢者施設の清掃、高齢者宅の除雪作業など幅広い仕事を用意しています。支援を始めて8年。藤里町社協会長は「ひきこもりにはそれぞれ理由があり、決して能力が低いわけではない。彼らを含めたみんなで支え合うまちづくりはきっと可能」と力を込めています。

(福井新聞 2018年4月19日)

## 全国から注目、小さな町のひきこもり支援

4/19(木) 11:14配信

福井新聞  
ONLINE



郷土料理を振る舞うレストランでは、ひきこもりだった人が働くこともある＝3月、秋田県藤里町

世界遺産・白神山地の南の麓、秋田県北部にある藤里町は人口3448人(2017年4月現在)、高齢化率は45%を超える。冬は雪に閉ざされる小さな町の社会福祉協議会のひきこもり支援が全国から注目を集めている。

2010年、地域福祉の拠点として「こみっと」を開設した。介護予防の機能訓練室、食事サービスの調理室、カラオケや囲碁将棋を楽しむサークル室、婦人会や老人会など各種団体の共同事務所…。社協の菊池まゆみ会長(62)は「ひきこもりとか高齢者とか特定せず、福祉サービスが必要な人に集まってもらう場所にしたかった」。いろいろな人が集うことで、ひきこもりに対する偏見を和らげる狙いもあった。

開設準備と並行し、1年半かけて、職員らと町内を戸別訪問し「こみっと」を周知した。すると予想もしない現実が見えてきた。18～55歳で、不就労期間が長く、家族以外との交流や外出がほとんどないひきこもりが113人いた。町内の同年齢人口の実に8・7%に上り、半数が40歳以上だった。

# 奈良県奈良市社協【地域住民が運営するコミュニティスペース 多機関・多分野連携の「いいばしょプロジェクト」実施】

奈良市社会福祉協議会が設置するコミュニティスペース「まんま」は、制度による支援などが届かない人たちの孤立を防ぎ、社会とのつながりをつくってもらうための取り組みです。**ここで実施される活動内容は福祉関係者のみならず、住民や多様な機関・団体によって提案・運営されています。**

コミュニティスペース「まんま」の活用方法は「**作戦会議**」と題する集会を実施し、地域でさまざまな活動を行っている市民団体や、地域福祉を学ぶ大学生、関心の高い地域住民などに参加を呼びかけ、話し合ってもらうこと。**不登校やひきこもり状態となっている若者たちもスタッフとして参加しています。**

その結果生まれたのが、「**ぼちぼちさん(まんまにいてくれるボランティア)**」、「**もりもりキッチン(地域の“おばちゃん”とひきこもりの若者が運営する食堂)**」、「**コミまんまの日(子どもと高齢者が一緒に遊べるコミュニケーション麻雀)**」、「**あなたのまんま(ひきこもりの人の居場所)**」、「**ご当地カフェ(奈良県立大学の学生たちが運営する郷土料理を提供するカフェ)**」、「**野菜市(ボランティアなどが地域菜園で収穫した野菜の販売)**」などの多彩な活動です。

(全社協『NORMA社協情報』 2017年9月)



# 東京都国立市社協【「ひきこもり大学家族学部 in くになち」を開催へ 参加家族や当事者で家族会設立も予定】

2018年2月11日(日)、**国立市社会福祉協議会の呼びかけで、「ひきこもり大学家族学部inくになち」を開催し、参加した家族や当事者らで家族会を設立します。**

ひきこもり大学とは、発案者である「ひきこもり」当事者によれば、親の会や支援団体に行くと、「どうやって外に出てきたの?」「親にどうしてほしかった?」などと質問攻めに遭うので、そんなに聞きたいことがあるのなら、ネガティブだと思っていた“空白の履歴”にも価値があるのではないかという考えから生まれたアイデアです。話を聞きたい人たちには自分の元に来てもらって、自分が講師になって経験や思い、知見などを授業します。「だったら、ひきこもり大学だよね」と、発案者がネーミングして始まった当事者発信活動です。

学部や学科名は、講師が伝えたいテーマに合わせて、自由にネーミングします。今回、国立市で開講される家族学部父親学科、母親学科は、まさに講師を家族たちが務め、ひきこもる子、あるいは兄弟姉妹との向き合い方などの経験や知見を伝えようというものです。(心と街を追うジャーナリスト・池上正樹「東京都8区市で『ひきこもり家族会』続々誕生」)

YAHOO! JAPAN ニュース ryota0042004 2899ポイント  
アプリでのお買い物毎日ポイント

キーワードを入力

トップ 速報 写真 映像 雑誌 個人 特集 意識調査

新着記事一覧 国内 国際 経済 エンタメ スポーツ IT・科学 ライフ

## 東京都8区市で「ひきこもり家族会」続々誕生

池上正樹 | 心と街を追うジャーナリスト  
2/1(木) 11:36

ツイート シェア B! ブックマーク

(ペイレシメーシズ/アフロ)

東京都内では、今年度1年間に8区市で「ひきこもり家族会」が続々と誕生する見通しであることがわかった。

そのうちの1つ、国立市では2月11日(日)、市の社会福祉協議会の呼びかけで、「ひきこもり大学家族学部 in くになち」を開催し、参加した家族や当事者らで家族会を設立する予定だ。

ひきこもり大学とは、発案者である「ひきこもり」当事者によれば、親の会や支援団体に行くと、「どうやって外に出てきたの?」「親にどうしてほしかった?」などと質問攻めに遭うので、そんなに聞きたいことがあるのなら、ネガティブだと思っていた“空白の履歴”にも価値があるのではないかという考えから生まれたアイデア。話を聞きたい人たちには自分の元に来てもらって、自分が講師になって経験や思い、知見などを授業する。

# 滋賀県大津市社協【ニートやひきこもりなど対象の子ども・若者総合相談窓口開設 心配ごとや悩みがあれば気軽に相談を】

ニートやひきこもりなどに悩む人たちを対象にした専用の相談窓口が大津市社会福祉協議会に開設されています。相談内容に応じて適切な専門機関につなぐほか、複数の機関で相談内容を共有し、当事者や家族らの「困難」を解消しようとする狙いです。

相談できるのは大津市在住者(15歳以上)です。まずは相談専用ダイヤルに電話して欲しいといいます。大津市社協の相談員や社会福祉士らが内容を聞き、電話で対応する・予約のうえ面談する・別の専門機関を紹介する、などで解決策を探っていくといいます。相談専用ダイヤルは祝日と土日、年末年始を除く平日の午前9時～午後5時。

大津市社協によると、開設から1カ月間の相談件数は15件。うち10件は、子どもの将来を心配する家族などからの相談でした。担当者は「心配事や悩みは抱え込まないで気軽に相談してほしい。次の一歩を切り開けるように、手伝いたい」と話しています。

(朝日新聞 2017年11月2日)



「心配ごとや悩みがあれば気軽に相談してほしい」。市社会福祉協議会には総合相談窓口が設けられている  
＝大津市大津4丁目

ニートやひきこもりなどに悩む人たちを対象にした専用の相談窓口が大津市に開設されている。相談内容に応じて適切な専門機関につなぐほか、複数の機関で相談内容を共有し、当事者や家族らの「困難」を解消しようとする狙いだ。

「大津市 子ども・若者総合相談窓口」があるのは、京阪電鉄 浜大津駅 近くの「明日都 浜大津」5階の市社会福祉協議会内。市が10月に開設し、委託を受けた協議会が運営する。相談できるのは市在住者(15歳以上)。

まずは相談専用ダイヤル(077・526・5316)に電話して欲しいという。協議会の相談員や社会福祉士らが内容を聞き、電話で対応する▽予約のうえ面談する▽別の専門機関を紹介する――などで解決策を探っていくという。相談専用ダイヤルは祝日と土日、年末年始を除く平日の午前9時～午後5時。

今回の窓口が教育や福祉などの関係機関をつなぐ核となり、機関同士が連携を強化できるようにした。事案によって相談先がわからない場合でも、一元的に受け付けるのが利点。これまでには相談者が相談内容に合った機関を探す必要があった。相談内容に応じて適切な専門機関につなぐほか、複数の機関で内容を検証することも想定している。

協議会によると、開設から1カ月間の相談件数は15件。うち10件は、子どもの将来を心配する家族などからの相談だった。協議会は「心配事や悩みは抱え込まないで気軽に相談してほしい。次の一歩を切り開けるように、手伝いたい」と話している。

昨年7月の市の調査では、市内でひきこもり状態にある人は235人。37・3%が10年以上のひきこもりだという。(北川サイラ)

# 兵庫県篠山市社協【NPOと連携し、不登校やひきこもりを経験した若者の新たな居場所づくり】

篠山市社会福祉協議会が、丹南健康福祉センター内で運営する「喫茶ふれあい」では、市内で不登校やひきこもりを経験した若者を支援するNPO法人「結」と連携し、週2回、調理、配膳や接客業務に、ひきこもりを経験した若者が従事しています。働き始めて8カ月の若者は「、まだまだ接客は緊張するけれど、今まで長く続けられなかった仕事を今も続けられていることが自信につながっています」と語ります。

また、日中に子どもたちが一人で過ごすことが多くなる夏休みと冬休みの期間中、「ささっこ食堂」という子ども食堂を始めました。子どもの参加にあたって、送迎付きにするなどの試みも行っています。「ささっこ食堂」では、学習支援や食事の調理に高校生や大学生などのボランティアを公募したところ17名も集まりました。

ひきこもりや不登校などの課題は、都市部に限らず潜在的な課題として存在しており、就労支援や子どもの居場所については、社会資源の乏しい地域の方が課題となっていることもあります。篠山市社協職員は、「学校との情報交換の中で、子ども食堂が必要な地域の情報も出ている。今後はこの取り組みの理解者や支援者を増やし、他の地域にも広げていきたい」と語りま



**事例2**  
篠山市社協が、丹南健康福祉センター内で運営する「喫茶ふれあい」では、市内で不登校やひきこもりを経験した若者を支援するNPO法人「結」と連携し、週2回、調理、配膳や接客業務に、ひきこもりを経験した若者が従事している。働き始めて8カ月の若者は「、まだまだ接客は緊張するけれど、今まで長く続けられなかった仕事を今も続けられていることが自信につながっています」と語



「ささっこ食堂」では子ども自身が企画したレクリエーションを楽しんだ

ひきこもりや不登校などの課題は、都市部に限らず潜在的な課題として存在しており、就労支援や子どもの居場所については、社会資源の乏しい地域の方が課題となっていることもある。  
社協職員の松本さんは「学校との情報交換の中で、子ども食堂が必要な地域の情報も出ている。今後はこの取り組みの理解者や支援者を増やし、他の地域にも広げていきたい」と語

# 秋田県由利本荘市社協【社会福祉法人と連携し、ひきこもりの若者の社会参加を支援「あおぞらサロン」開催】

由利本荘市社会福祉協議会が行っている「ひきこもり若者等の居場所づくり活動あおぞらサロン」は、社会参加の機会が少ない若者が定期的に活動に参加できる居場所をつくり、若者の自立、社会参加意欲の向上を目的としています。対象者は、市内在住の概ね18歳～39歳の方としていますが、親や関係者、そのほか希望する方の参加も可能とし、状況に応じて柔軟に利用することが可能です。

市社協では、実施に当たり障害者就労継続支援事業の実施でさまざまな作業知識や人材をもつ**社会福祉法人「秋田県心身障害者コロニー」**と連携。相談を受けた秋田県コロニーとしても、地域に貢献できる活動を行いたいという強い思いをもって内容を模索していました。そこで、両者が連携すれば互いの強みを活かすことができると意見が一致し、協働に向けて話はすすんでいきました。

参加対象者への声かけは、民生委員・児童委員等から情報提供のあった世帯を中心に社協職員が直接訪問を行いました。試行錯誤を繰り返しながら訪問を重ねた結果、初回の活動には2名の若者と両親等5名の付き添いの計7名の参加につながりました。（「NORMA社協情報」2017年1月）



# 京都市社協【就労経験のない10年来のひきこもり男性を仕事につなげる 4年目迎えたチャレンジ就労体験事業】

京都市社会福祉協議会では、生活保護を受給している人、生活に困窮している人を対象に、就労体験の場を提供することで自立を支援する「チャレンジ就労体験事業」を実施しています。4年目を迎えた平成28年度は、すでに年間の支援定員120人を上回る129人の申し込みを受け、うち74人が体験に臨んでいます。生活リズムが整わない、人との関わりに不安があるなどのため就労に向き合えない人が、体験先のサポートを受けて短時間の就労体験を重ねることで自信と意欲を回復し、一般就労したり、ボランティアとして居場所を見つけることにつながっています。

35歳の男性Bさんは生活保護受給中。独居生活を送るBさんは、人との関わりに不安があり、大学中退以降10年以上ひきこもり生活を送ってきました。そのBさんの就労体験は、デイサービスセンターで浴室の清掃を週2回2時間行うこと。Bさんの仕事ぶりを体験先は高く評価し、体験終了後はアルバイトとして雇用したいと提案したところBさんは笑顔で快諾、現在は非常勤で継続勤務しつつフルタイムの仕事を探しています。

(京都市社協「福祉のまちづくり」平成29年1月号)

目次 2017-176

福祉ボランティア・社協フェスタ … P.4～5  
チャレンジ就労体験事業の取組 …… P.6  
地域あんしん支援員設置事業の取組 … P.7

福祉のまちづくり

**社協フェスタ 開催**

福祉や災害時に備える大切さを学ぶ「福祉ボランティア・社協フェスタ」が10月16日に開催されました。  
……詳細は4、5ページ

……老人福祉センターによる認知症予防のまちづくりを学ぶ

**困難を抱え孤立する人に寄り添う**

京都市社会福祉協議会では、誰もがその人らしく地域の中で暮らすことができるよう、個別支援の取組を展開しています。本誌では、既存の制度では困難な状態の問題を抱える人に寄り添い支援を行う「地域あんしん支援員設置事業」生活に困難している人に就労体験の場を提供することで自立を支援する「チャレンジ就労体験事業」の2つの取組を紹介しています(詳細は6、7ページ)。

相談の様子 ▶

社会福祉法人 京都市社会福祉協議会  
人に優しく、災害に強い、社会の総合力とネットワークを活かした福祉のコミュニティづくりを進めます。

# 兵庫県芦屋市社協【総合相談から始まる多様な社会参加の場づくり 個別課題を地域での解決につなげる】

芦屋市社会福祉協議会では、平成22年度より福祉に関する相談のワンストップ機能を担う「総合相談窓口」を保健福祉センター内に設置。平成27年度からは、生活困窮者自立支援制度における自立相談支援機関としての機能も加え、市役所内の多様な部局と連携しながら、経済的困窮・社会的孤立の課題に対する支援を展開しています。

「引きこもり」の支援にあたっては、相談に訪れる家族の思いを受け止めつつも、就労ありきではなく、「働きたいが自信がない」という本人の思いに寄り添う姿勢を大切にしています。そこで、社会参加のきっかけづくりとして、保健福祉センター内での資料印刷の手伝いや、地区福祉委員会の作業への参加など、居場所づくりの試みを地区担当職員と連携して行っています。平成28年度からは、市社協が近隣の商店街に設置している憩いの場「まごのて」の運営に、本人たちがボランティアとして新たに関わり始めました。月2回の活動日を設定し、市内各所へのチラシの掲示やイベントの手伝いなどを通して生活リズムの調整が図られています。情報紙の編集などはパソコン操作の練習にもなり、実際に就労につながった事例も出ています。  
(兵庫県社協「ひょうごの福祉」2017年4月号)

あなたのまちの社協ナビ  
市社協の取り組んでいるさまざまな活動を紹介します。

活動を もっと詳しく 知りたい方は  
芦屋市社会福祉協議会  
☎0797-32-7530  
芦屋市社協 総務課



## 総合相談から始まる 多様な社会参加の場づくり

芦屋市社協では、平成29年3月に、「みんながつながるお互いさまの芦屋～NotひとごととYesじぶんごと～」を基本目標とした第7次地域福祉推進計画を策定した。同計画では、推進目標として、「多様なニーズに対応した社協らしい相談支援・生活支援の推進」を掲げ、行政・専門職だけでなく、地域で解決できる総合相談・生活支援体制の充実を目指している。

### 関係機関との連携による「総合相談窓口」の展開

市社協では、市の構想に基づき平成22年度より福祉に関する相談のワンストップ機能を担う「総合相談窓口」を保健福祉センター内に設置し、各相談機関へのつなぎなどを行ってきた。平成27年度からは、生活困窮者自立支援制度における自立相談支援機関としての機能も加え、市役所内の多様な部局と連携しながら、経済的困窮・社会的孤立の課題に対する支援を展開している。

毎月の相談件数は平均20件程度。相談内容としては、福祉サービスの利用に関する説明や紹介のほか、生活福祉資金の貸し付けや生活保護などの他制度・他機関へのつなぎが多くを占めるが、自立相談支援事業としての継続支援に至る場合も少なくない。相談者の年代は多様であり、特に男性の場合は引きこもりや離職、女性の場合は家計に関する相談が多いという。市社協では、これらの相談に的確に対応できる総合相談機能の向上を目指して、各種窓口が一堂に会する「総合相談連絡会」(月1回)や事例検討会の開催などを通じた支援体制づくりを進めている。

### 地域における多様な社会参加の場づくり

「引きこもり」の支援にあたっては、相談に訪れる家族の思いを受け止めつつも、就労ありきではなく、「働きたいが自信がない」という本人の思いに寄り添う姿勢を大切にしている。そこで、社会参加のきっかけづくりとして、保健福祉センター内での資料印刷の手伝いや、地区福祉委員会の作業への参加など、居場所づくりの試みを地区担当職員と連携して行っている。

平成28年度からは、市社協が近隣の商店街に設置している憩いの場「まごのて」の運営に、本人たちがボランティアとして新たに関わり始めた。月2回の活動日を設定し、市内各所へのチラシの掲示やイベントの手伝いなどを通して生活リズムの調整が図られている。情報紙の編集などはパソコン操作の練習にもなり、実際に就労につながった事例もある。作業後は茶話会も設けられ、他のボランティアとの交流の機会もとなっている。若い人たちが関わることで「まごのて」の運営も活性化しているという。相談者本人の自立支援に向けて、地域住民と距離の近い社協ならではの取り組みが展開されている。



総合相談窓口は多くの相談機関が集約された保健福祉センターの一角に設けられている。



「まごのて」の作業では「生活に預りができた」「人と話すのが苦手でなくなった」との声も

### 取材を終えて

今後は地域内での生活物品の買い回りのシステムづくりや地域食卓の開催なども検討されているとのこと。相談支援から見えてきた個別の課題を地域での解決につなげていくという、市社協の取り組みの新たな展開がともな楽しみです。

### 会長から

芦屋市社会福祉協議会 会長 加納 多恵子

芦屋市社協では、本年度から5年間の「第7次地域福祉推進計画」を策定しました。少子高齢化に伴い複雑化する課題のうち、「災害」や「生活困窮」「認知症」「権利擁護」などの社会情勢にも対応していくことを心掛けました。また、総合相談窓口が「地域の困りごとの解決」のために活用されるよう、重点的な取り組み事項として位置付けています。

今後は、社協が先導に立ち、地域や関係団体と手をつなぎ、芦屋らしい地域福祉の実現に向けて、事業・活動等、社協の機能強化に取り組んでいきたいと思っております。



全社地発第 115 号  
令和元年 6 月 7 日

都道府県・指定都市社会福祉協議会事務局長 殿

社会福祉法人 全国社会福祉協議会  
地域福祉推進委員会  
委員長 川村 裕



関係機関・団体との協働によるひきこもり状態にある人と家族の支援について（お願い）

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて今般、川崎市の事件や農林水産省の元事務次官による事件など、痛ましい事件が続いています。事件の詳細は現在捜査中であり、事実関係は定かではありませんが、安易にひきこもりに結び付ける報道もあり、ひきこもりの子どもをもつ親などから社協に相談が寄せられていると聞いています。

今まさに地域で困難な状況に直面しているひきこもり状態の人とその家族に寄り添い、相談を受け止め、社会とのつながりを回復するための支援を行うことが求められています。

私たち社協は、『社協・生活支援活動強化方針』のなかで、「地域における深刻な生活課題の解決や孤立防止に向けた行動宣言」を行い、あらゆる生活課題への対応と地域のつながりの再構築に向け、事業や活動を展開しています。

このため、ひきこもり状態にある本人や家族の課題解決に向けて、社協は専門機関や行政、社会福祉法人・施設、民生委員・児童委員、地域住民等と協働し対応することが不可欠です。

つきましては、趣旨ご理解の上、貴県・市社協におかれましては下記事項にご留意いただき、ひきこもり状態にある人と家族に対する必要な支援・対応をお願いいたしますとともに、貴管内市区町村社協への周知につきましてもご高配賜りたくお願い申し上げます。

## 記

### 1. ひきこもりの人の特徴と対応上の留意点

- ・ひきこもり状態に至る原因はさまざま、本人やその家族の悩みや苦しみの相談支援は、心理、精神医学等の専門家を交えて時間をかけて対応することが必要です。しかも、本人や家族はひきこもり状態を隠す傾向が強く、また孤立しがちで、自ら相談に来ない、来られない人も多くいます。このため、社協は地域の関係者とともに、できるだけ早期にひきこもり状態にある人を発見・把握し、相談につなげる必要があります
- ・ひきこもり状態にある人自らが相談を申し込んだり、相談窓口を訪れたりすることはまれで、大部分は家族など関係者からの相談受付から始まります。家族から社協に相談が

あった場合、まずは家族の苦勞をねぎらい、相談をしっかりと受け止めてください。長期にわたって悩み、苦しんできた家族は、勇気を振り絞って相談窓口で電話をしたり、訪れたりすることが少なくないからです。

- ・ひきこもりの相談支援は非常に難しく専門性が要求されます。このため、社協だけで抱え込むのではなく、対応にあたっては、「2. ひきこもり支援を行う関係機関」で挙げた支援機関等との連携が重要です。
- ・また、社協として対応できない場合でも、そうした支援機関を紹介・情報提供したり、必要に応じてつないだりします。相談者の中には支援機関を紹介しても、そこに行けない人や、何が主訴か相手に説明できない人もいます。このため、社協は関係機関・団体等とともに、可能な限り、同行支援や本人・家族の代弁をするなど、伴走型の支援を行うことが必要です。

### 2. ひきこもり支援を行う関係機関

#### ◇ひきこもり地域支援センター

<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000515493.pdf>

都道府県・指定都市に所在し、ひきこもりに特化した第1次相談窓口としての機能を有している。「ひきこもり支援コーディネーター」を配置し、ひきこもりの状態にある本人や家族からの電話、来所等による相談に応じ、助言を行うとともに、家庭訪問を中心とするアウトリーチ型の支援を行う。

#### ◇精神保健福祉センター

<https://www.mhlw.go.jp/kokoro/support/mhcenter.html>

都道府県・指定都市に所在し、ひきこもりのほか精神保健福祉全般にわたる相談を行っている。電話や面接で相談できる。

#### ◇保健所

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/hokenjo/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/hokenjo/index.html)

ひきこもり相談をはじめ、こころの健康、保健、医療、福祉に関する幅広い相談を受け付けている。相談は電話相談、面談による相談があり、保健師、医師、精神保健福祉士などの専門職が対応する。また、相談者の要望によって、保健師は家庭を訪問して相談を行うこともできる。

#### ◇市町村保健センター

保健、医療、福祉について、身近で利用頻度の高い相談に対応している。障害福祉サービスなどの申請受付や相談、保健師による訪問等の支援を行っている。問い合わせは、各市町村役所・役場まで。

#### ◇生活困窮者の自立相談支援機関

<https://www.mhlw.go.jp/content/000505281.pdf>

#### ◇ひきこもり家族会（支部）

<https://www.khj-h.com/meeting/families-meeting-list/>

家族会では、家族の学習会、月例会（講演会）相談会・アウトリーチ（訪問）居場所運営などを行なっている。

### 3. 本件に関する問い合わせ先

全国社会福祉協議会地域福祉部 担当：水谷、平井、高橋

TEL03-3581-4655 E-mail:z-chiiki@shakyo.or.jp



ふれあいネットワーク